



- ① 新型コロナを乗り越える
気持ちを込めた刺しゅう
- ② 正確に縫う技術に定評
があります
- ③ 慣れた手つきでボタンを
付けていく利用者
- ④ 縫製班では13人の利用
者が作業をしています



平塚農商高校農業校舎の東隣、広い敷地の一角にある貴峯荘・貴峯荘ワークピアでは、縫製や印刷、クリーニングなどの作業をしています。縫製班の作業場に、エプロンを作る利用者の姿がありました。型紙を使って生地を切る。そこから縫製するまで利用者が役割分担し、時にスタッ

貴峯荘
貴峯荘ワークピア
達上ヶ丘1-9 ☎31-0617

の補助を受けながら作業します。エプロンが業務用の刺しゅうミシンにセットされると「がんばろ hiratsuka」というカラフルな文字が刺しゅうされました。高橋さん(2面)から「新型コロナを平塚市民みんなで乗り越えようというメッセージを込めた商品を作れないか」と提案をもらったのが、きっかけでした。話したのは、縫製班の主任で職業指導員の菊本明美さん。どんな工程にしたら利用者が作業しやすいかを考えて、試作品を作りながら完成しましたと続けます。

「エプロンは、かなり前から作っている製品ですね。ほかにもエコバッグやトートバッグ、高齢者施設などです。防水素材のエプロン、シーツを作ったり、病院のユ

ニホームのボタンを付け直ししたりと、幅広い作業をしています」と菊本さん。「ほかの施設の利用者が描いた絵をあしらった製品を作る時は、皆さんうれしそうに作業しています。色が鮮やかで楽しいのでしょわん」とは笑います。お客さんが事業所に来ると、オーダーメイドの相談をしたり、その場で商品を買ってくれたりすることもあるそうです。自分たちが作ったものを直接お客さんが買ってくれるのを見ているのは、利用者のモチベーションにつながります。働くことを通じて、社会とつながっているのを実感できますからね。新型コロナが収束したら、利用者が販売に顔を出す機会を増やして、喜びを感じてほしいです」。



みんなの家 ミミ
横内3784-3 ☎71-6418

レキ材のまな板も人気商品

「この事業所は、規模は大きくないですが、アットホームな雰囲気なのが特徴です。利用者さん同士が気持ちを分かち合うとともに、作業の得手不得手を補い合っています」と話すのは、管理者の太田原裕子さん。みんなの家ミミは平成24年に開所し、木工製品作りを中心に、ボールペンの組み立てのような軽作業や農作業などを行っています。「スタッフは10人、利用者は20〜69歳で、毎日18人前後が通っています。作業を通じて楽しい時間を過ごすことがモットーです」。

同事業所の一押しは、カエルの木工製品。一人が最後まで作るのではなく、みんなで一つのものを作るということを大切にしているといいます。「小さな製品ですが、出来上がるまでにはたくさんの工程があります。糸のこぎりで切り出す人、削る人、色を塗る人、目を描く人など、多くの人が関わって出来上がるんです。みんなで作ったものが売れたという喜びを共有してもらいたいと思って、作業しています」と太田原さんは笑顔を見せます。

同事業所では、同じ作業を続けるのではなく、午前・午後で別の作業をするなどの変化をつけているそうです。太田原さんは「飽きてしまうこともありますが、いろいろな作業をすることで新しいアイデアが生まれることもありますからね」と話します。ここ2年ほどは、だるまのキーホルダーが人気で「ありがとう」にも出品しています。「交通安全・コロナに負けるな・福・合格など、さまざまな願いを込めて作っています。どれも色が違って表情が豊かなので「選んでいて楽しい」と好評の声を頂いています。ぜひ手に取ってみてください」。



カラフルな製品が出来ました

目を描いて完成です



サンメッセ しんわ
高根277 ☎35-3800

衛生面に注意してマスク作り

「新型コロナが流行してマスク不足が叫ばれた昨年の春は、布マスク作りで忙しかったです。「ありがとう」では整理券が必要になるほどの人気でした」と話すのは、施設長の庭野勉さん。普段の作業に優先して、マスク作りに取り掛かったといえます。「コロナ禍で販売会やイベントなどの中止が相次ぎ、利用者本人が活躍する場面が減っていました。その中で自分たちが作ったマスクを多くの方が買ってくださって、使ってもらえるということがやる気につながり、活気が出ました」。

平成15年に開所したサンメッセしんわは、マスクや布巾、小物入れといった製品のほか、パンやお菓子なども作っています。パンはレストランや高齢者施設への納品に加え、学校給食にも採用されているほどの主力製品です。中でも売れ行きが好調なのが、市の名産品になっている「湘南みかんぱん」。間引きして捨ててしまう青摘みミカンを利用しようという発想からパン作りが始まりました。果汁を餡や生地に混ぜていて、さわやかな酸味と優しい甘みが特徴。利用者が工程をこなせるように開発され、徹底的な衛生管理の下で製造されています。18歳から通って11年目、主に仕込みや成形を担当している早川雅人さん(右下写真)は「多い時は1日で1,000個ほどパンを作ります。きれいに焼けた時や、販売会に出掛けてお客さんに「おいしい」と言ってもらえた時に、うれしさを感じます。利用者だけで作業ができる工程をもっと増やしていけたらと思っています」と意気込みを話してくれました。



一つ一つ重さを計り、正確に作業します

作業中の表情は、真剣そのもの

ありがとうの気持ちで

障がい者福祉ショップ「ありがとう」は、市内や近隣地区の障がい者福祉事業所が作った製品を販売する店です。広報ひらつかのコラム「広げよう福祉の輪」で事業所を順次紹介していますが、今号では参加する事業所を三つ紹介します。各事業所の利用者が心を込めて作った商品を手

問 ありがとう事務局
(しんわルネッサンス内)
☎58-5414



**強みは
質の高さ**



「ありがとう」は、障がい者の就労意欲を高めることや、自立した日常生活と社会参加を支援することを目的として平成26年7月にオープン。まもなく7年を迎えます。29の事業所が協力して運営しています。ひらつか障がい者福祉ショップ運営協議会の高橋真木会長(左写真)は「お弁当やパン、お菓子などの食べ物をはじめ、エコバッグや布巾などの日用品も並んでいます。定番商品のほかにも、季節の限定商品なども置いてありますよ」と笑顔で話します。「ありがとう」の売り上げ

は、各事業所の利用者に給料として還元されます。「市役所本館の多目的スペースを借りてお店を開いています。市から金銭的な補助は受けていません。運営協議会の中で、補助を受けないことを重視する声もありましたが、自分たちの力で運営することの大切さを理解してもらいました。売り上げがないとお店が続かないので緊張感があります。ただ、プレッシャーというわけではなく、自分たちが運営しているんだという実感が背中を押してくれている感じがします」。

障がい者福祉ショップ ありがとう

各事業所が作った商品を販売しています。市役所にお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。



市役所開庁日の午前10時〜午後3時30分 本館1階多目的スペース

新商品を作れないかと提案することもあるそうです。「この事業所も、どうやら利用者たちが作業しやすいかなと、そこを考えた商品化してくれそうです。利用者もやりがいを感じながら作業してくれていると話を聞きますね」と高橋会長。「ありがとう」が店の売り上げだけでなく、自分たちで運営できているの、お客さんに商品の質の高さを評価してもらえているからだと思います。利用者が丁寧に作業して、スタッフも利用者

が正確に作業できるように工夫を凝らしているのが、実を結んでいるのではないのでしょうか」と目を細めます。買い物に来た人から「これ、いいですね。また来ます」と言葉を掛けられて「お客さんからの言葉は、私たちの原動力です。皆さんのおかげで毎日通っています。うに「ありがとう」の気持ちを込めてお店に立っています。体が動く限り、お店に立ち続けたいですね」。